

ひょうごの遺跡

平成9年10月31日発行
兵庫県教育委員会
埋蔵文化財調査事務所
神戸市兵庫区荒田町2-1-5
☎652 TEL 078-531-7011
FAX 078-531-7014

特集 平成9年度前半の復興調査

平成9年度は震災復興3ヵ年計画の最後の年にあたります。今年度も兵庫県教育委員会が関わっているものだけでも神戸・阪神間を中心に10～15ヶ所の発掘調査が常に行われています。支援職員は13名のメンバーが新たに加わり25人体制で調査を行っています。今回は年度前半の復興調査の特集です。このなかには、自動車が昼夜なく往来する国道2号線の道路の下を発掘するという厳しい調査も含まれています。開発され尽くし、掘り返され尽くしたと思われる大都市の地下にも遺跡は残り、眠りつづけているのです。

ひょうご
兵庫津遺跡 (神戸市兵庫区) ※兵庫県調査



中世の石組み遺構

兵庫津は、古くは「大輪田の泊^{おねだ とまり}」と呼ばれ、「五泊」の一つとしてしばしば史料に登場します。12世紀後半には平清盛が大改修を行い、平氏政権の経済的基盤として急成長を遂げました。平氏滅亡後は博多や瀬戸内海各地の港と大消費地である京都とを結ぶ集荷港として大いに賑わいをみせ、中世を通じて重要な港湾都市としての機能を維持していました。このことは15世紀中頃の記録である有名な『兵庫北^{きた}関入船納帳^{ぜきいりふねのうちょう}』からもうかがうことができます。

その後、兵庫津は応仁・文明の大乱の兵火にかか

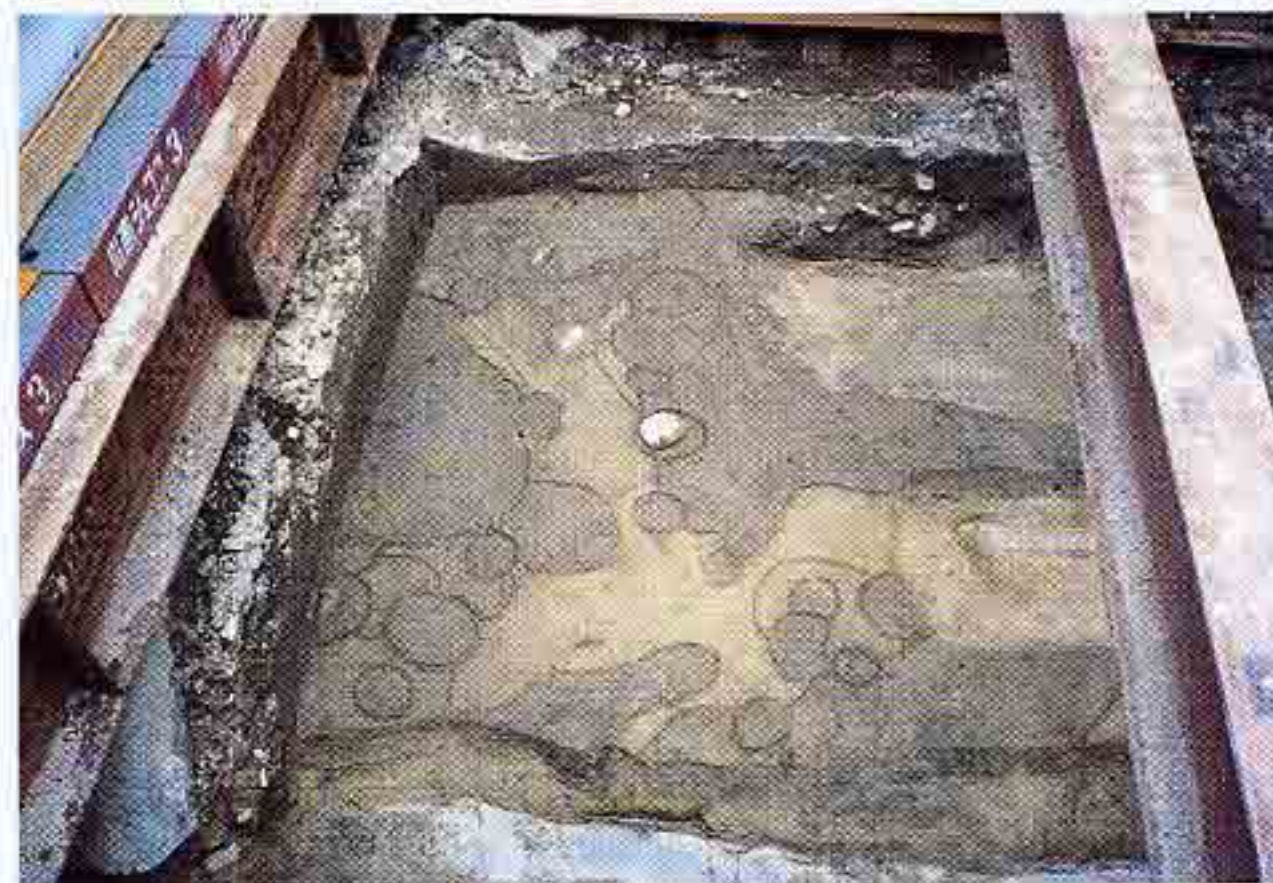


狭い場所での発掘調査

りその大部分が焼失しました。また堺の台頭によって一時衰退しますが、近世に入ると瀬戸内航路の中継基地としての機能を取り戻し、以後明治に至るまで港町として重要な地位を占めていました。

今回の調査は災害時のライフライン確保を目的として、神戸市兵庫区兵庫町から東柳原町に至る国道2号線内に共同溝を敷設する工事に伴うものです。頭上に阪神高速神戸線が走る、交通量の多い市街地内での調査でした。そのため騒音・排気ガス・ホコリ・暑さなど様々な困難が伴いました。

調査の結果、今回の調査地点は14世紀～15世紀代を中心として、12世紀後半～19世紀代に至る集落遺



おびただしく密集する遺構群



道路下での発掘調査

跡であることがわかりました。

検出された遺構は掘立柱建物、溝、井戸などが中心で、港そのものを示すような施設、例えば船着場などは見つかっていません。遺跡は砂堆上に形成されていて、地盤が弱いため建物を建てる際には丁寧に整地されたと考えられますが、近世以降の削平によって明確な整地層は確認できませんでした。

また、柱穴には柱の沈下を防ぐために根石をもたせてあります。柱穴は複雑に重なりあって、非常に密集して見つかっており、通常の集落遺跡のありかたとやや違ってしています。

検出された遺構のなかで、注目されるものとして方形の石組み遺構があります（巻頭写真参照）。

石組みは人頭大の石を方形に巡らし、その内側に拳大の石を一定の方向に並べて詰め込んでいます。その性格については断定はできませんが、いまのところ倉庫の基礎部分にあたるのではないかと考えています。

以上、今回の調査では、港そのものの確認には至りませんでした。その遺構の密集状況や遺物の出土状況から考えて、中世における物流の拠点として栄えた港湾都市である兵庫津の一部が考古学的に確認できたと考えています。



井戸枠に転用された羽釜

いのしょう

猪名庄遺跡 第31次調査地点（尼崎市潮江） ※尼崎市への支援調査

猪名庄遺跡は、JR尼崎駅の北側一帯に広がる遺跡です。遺跡名にもあるとおり、奈良時代に東大寺領となった荘園の推定地です。12世紀頃に作成されたと推定される猪名庄の絵図が現存します。

今回、尼崎駅北側の市街地再開発事業に伴って実施した発掘調査により、古墳時代前期から鎌倉時代を中心とした遺構が確認できました。

古墳時代中頃（今から約1500年前）の遺構として



奈良時代後半の掘立柱建物跡



奈良時代後半の井戸



調査地遠景

は、古墳の周溝（まわりに掘った溝）がかろうじて残っていました。溝の中からは、マツリに使われたであろう完形品の須恵器・土師器が見つかりました。また旧河道の砂層からも近くから流れてきたと思われる須恵器・土師器が多数出土しました。

今回特に注目されるのは、初期の荘園に関する遺構が発見されたことです。奈良時代後半（今から約1250年前）の掘立柱建物跡4棟と井戸1基が見つかりました。建物のうち、2棟は倉庫と考えられます。それぞれに新旧2時期の建物が同じ位置で建て替えられているようです。これらの建物は計画的に配置されていることから、猪名庄関連の建物と推定できます。また井戸の底には5枚の土師器の皿が並べられていました。そのうちの3枚には墨で記号や文字が書いてあります。

平安・鎌倉時代になると、建物とそれを巡る溝、井戸が多く見られます。掘立柱建物跡10棟、井戸14基、柵4列を検出しています。井戸には土鍋の底を抜いたものと、曲物を使っているものがあります。荘園の発達に伴って建物が増減している様子がうかがえます。



現地での説明会

しんぼう

新方遺跡

野手・西方地点（神戸市西区） ※神戸市との共同調査

新方遺跡は、明石川とその支流の伊川の合流点の北側に広がる遺跡で、両河川の氾濫原にあたり、各時代の遺構が良好な状態で保存されています。今回の調査は、土地区画整理事業に先立って、神戸市教育委員会が確認調査を行ったもので、県埋蔵文化財調査事務所復興調査班の職員3名が支援しました。調査の結果、弥生時代前期（今から2300年前）から近世の遺構・遺物が検出されました。

特に注目されるのは、弥生時代前期の溝内に埋葬された人骨です。人骨が発見された溝は、標高約6mの埋没段丘上に立地しています。調査区の北端から埋没段丘の南端まで南北に直線的に掘られており、長さ14m、幅1.4mありました。人骨は、3体発見され、溝がある程度埋まった段階で、それぞれに土坑を掘り込み埋葬されたものと判断されました。3体の人骨は、頭を北側にし、手足を伸ばした状態で埋葬されており、3体の人骨すべてから石鏃（石で作られたやじり）が出土しました。特に人骨3（右上写真の手前と右下の写真）からは、17点の石鏃が発見されました。そのうち、約半数の石鏃が欠けており、残りの破片も同時に発見された例もあり、被葬者に射込まれたものと考えられます。また、アゴの骨などの特徴から、縄文人的な特徴を持った人骨であり、縄文時代から弥生時代への移り変わりを考える上でも重要な成果を得ることが出来ました。

その他に、古墳時代中期（今から1500年前）の多量の土器（高杯・壺・甕・蛸壺）といっしょに勾玉や有孔円板、剣形石製模造品や1500点を越える臼玉が出土（左下写真）し、当時のお祭りのようすを考える上で、貴重な成果を得ることが出来ました。



古墳時代中期祭祀遺構



弥生時代前期人骨出土状況



人骨3の石鏃出土状況

あかしじょうぶ け やしきあと
明石城武家屋敷跡

(明石市東仲ノ町)

※明石市への支援調査

明石城は江戸時代の初めに築造されたお城です。その城下の町割りは、時の剣豪宮本武蔵がつくったともいわれており、武家屋敷は城下町のなかでも外堀に囲まれた中に配置されていました。発掘調査は市街地再開発事業に伴うもので昨年の9月から行っています。調査地は武家屋敷の東側の一角にあたります。

調査では江戸時代の陶磁器や木製品、屋敷境の溝・井戸・埋桶・埋甕などが発見されました。特に屋敷境の溝は大きいものでは幅4m深さ1.6mの規模の



屋敷境の溝



現地説明会のようす

ものがあり、排水溝も兼ねていたようです。屋敷内には井戸も多く掘られており、桶組みの井戸や瓦積み井戸が見つかりました。出土した陶磁器の中には、藩主の松平家の家紋である「三つ葵」の紋が入った皿があります。家来が「ほうび」としてもらったものかもしれません。また「明石本町平□宗八郎」と刻まれた陶器など、多くの文字資料も発見され、江戸時代の武家の生活を知る手掛かりとなりました。

8月には現地説明会を行い、夏休み中の子供たちを始め、多くの参加者がありました。

ありおかじょうせき い たちみごうち
有岡城跡・伊丹郷町

第192次(伊丹市宮ノ前)

※伊丹市への支援調査

JR伊丹駅と阪急伊丹駅の間に大きく広がる近世の在郷町の遺跡です。今回の調査は、共同住宅建設に先立って実施されました。本遺跡は昭和50(1975)年の第1次から数えて192次の調査を行っています。

発掘調査では、近世を中心にした6時期にわたる遺構・遺物が確認できました。

江戸時代では、あわせて5つの時期の遺構面を検出しました。中でも注目されるのが元禄時代の火災にあった遺構面です。江戸時代の文献によると今回



江戸時代中期の遺構



焼土を廃棄した土坑

の調査地点付近では元禄12(1699)年と元禄15(1702)年に多くの民家や寺院を焼失した大火災が起こったことが記録されています。調査では、その2度の火災の際に生じた大量の廃棄物(瓦・陶磁器・壁土・焼土・炭など)を処理するために掘られた大型の廃棄土坑が約10基検出されました。この大型の土坑や大量に廃棄された遺物が、当時の火災の甚大な被害を物語っています。

うちで●こづち
打手小槌遺跡

第24地点（芦屋市若宮町） ※芦屋市への支援調査

市営住宅の建設に伴い発掘調査を行いました。

ここでは縄文時代から近・現代にかけて断続的に生活が営まれてきたことがわかってきました。

中世には水田が営まれており、等高線に沿って東西の鋤溝を検出しました。鋤溝に沿って検出した溝の脇には、刀子（昔のナイフ）が同じ向きに置かれていました。何かのおまじないの可能性が推測されます。

中世の水田の下層には弥生時代中期初頭の面があ



中世の鋤溝



弥生時代遺物出土状況

り竪穴住居4棟、土器棺、溝などを検出しました。

ある竪穴住居は、住居が棄てられた後にごみ穴に再利用されたらしく、拳大～人頭大の石や、バラバラの土器が大量に出土しました。土器に混じって結晶片岩製の石包丁が出土しましたが、刃が折れていました。調査地点は海辺に近い低地の沖積地で、特に阪神電車より南側には、弥生時代の遺跡はほとんどみつかっていませんでした。また弥生中期初頭といわれるⅡ様式の遺跡の検出例も少なかったので今回の発見は貴重な例となりました。

まるづか
丸塚遺跡

（神戸市西区） ※兵庫県調査

丸塚遺跡では、土地区画整理事業の道路予定部分の発掘調査を行いました。

発掘調査を行った部分は、昔、^{はげたに}櫛谷川が氾濫したところで、洪水で運ばれた砂が厚く堆積していました。その洪水砂を掘り下げると、下から水田の跡が発見されました。時代は3世紀頃と考えられます。

水田は粘質土でつくられた畔^{あぜ}が非常に高く残っていたためにわかったもので、畔の高さは20cm近くもありました。

特に、B地区と呼んでいる幅6m・長さ53mの東



足 跡



水田跡

西方向の調査地区では、南東が高く北西に低い、高低差約50cmという地形にあわせる形で水田が階段状につくられており、棚田のようになっていました。

畔はほぼ東西・南北方向で、水田一枚の規模は一辺3m程度から、大きいものでも一辺6m程度の小さいものでした。

水田のあちこちには足跡が残っており、足跡の窪んだ所には砂がたまっていました。中には指までわかったものもあり、足の大きさは17cm程度から24cm程度までありました。

むろうち

室内遺跡 (神戸市長田区) ※兵庫県調査

新湊川の災害復旧工事によって調査を行いました。

この川は、明治30年代に新たに開削^{かいさく}された河川で、今回の調査地点も通水時には河底にあたっていたと考えられ、その際に遺跡も削られたとされていました。しかし、確認調査の結果、偶然にも、遺跡は壊されていないことがわかりました。

室内遺跡は、現在は室内小学校を中心とする一帯を指していますが、かつては「房王寺遺跡」と呼ばれていた遺跡の一部にあたります。房王寺遺跡から瓦が出土することは、古くからわかっており、白鳳^{はくほう}期の瓦として知られている軒丸瓦は、室内小学校の東にあたる「塔の本」という小字から出土したものと伝えられています。また、先にあげた新湊川掘削の際にも礎石が出土したといわれ、昭和の初めにも室内小学校のプール建設に伴って多量の瓦が採集されています。さらに、会下山^{えげやま}西方一帯には「塔の本」のほかに「室ノ内」「房王寺」「堂ノ前」「東大門」などの寺の存在をうかがわせる地名があります。しかし、発掘調査によって寺院の遺構が検出されたことはなく、このあたりに寺院跡があったと推定されるにとどまっていた。

今回の調査では、調査区のほぼ中央に掘立柱建物の柱穴が見つかりました。調査区の幅が3mほどでしたので、建物の規模を復元するには至りませんでした。遺構面の上には洪水で運ばれた砂が堆積していたことから、ここは洪水による被害を受けたことがわかります。瓦片は、洪水砂の中からの出土が特に顕著です。洪水によって流された瓦や柱穴出土の土器から、調査地あたりには平安時代前半の建物があったと見られます。

調査区の西端には、径10m・深さ65cmほどの落ち込みがあり、ここからも同時期の古瓦が出土してい



調査のようす



塑像の台座

ます。その中には、軒丸瓦と軒平瓦が各2点ずつありました。軒丸瓦・軒平瓦の1セット(写真)は芦屋廃寺で出土したものと同じで、両遺跡の関係がうかがえる資料です。また落ち込みの最下層では、塑像^{そざう}の台座(写真)が出土しました。台座は半球をなしており、両足の指が明瞭に刻まれています。上部は破損していますが、仏像の台座と思われ、像高は50cmくらいと推定されます。両横には幅の狭い側部(天衣)が取りついているので、菩薩像の台座と見られます。塑像には彩色があるのが常ですが今回の出土品では確認されませんでした。出土状況から、この塑像は奈良～平安時代前半のものと考えられます。

このように、今回の調査では白鳳期にまでさかのぼる遺構や遺物は検出できませんでしたが、奈良時代から平安時代には寺院があったことが事実となりました。しかし、調査した面積がわずかであったので、建物の広がりや範囲は依然として不明のままです。今後、周辺での調査によって、遺跡の全貌が明らかになると期待されます。



出土した瓦

ご あ い さ つ

9月30日で2名の支援職員の方が離任されることになりました。半年間でしたがどのような感想をもたれたのでしょうか。一文を寄せていただきました。

本年4月の赴任にあたり、大きな不安はなかったものの、やはり初めての職場環境へ肩をはらず早く馴染まなくてはと思っていました。しかし、すでに赴任されていた埋文仲間の皆様、さらには庶務関係の皆様の心あたたまる対応に、むしろ長年勤めた職場に帰ってきた思いで着任できました。

また、関係市町の皆様には震災復興という大変な時期に個人的犠牲をかえりみず、埋文保護の調整や私達派遣職員をお世話いただき敬意と感謝の念一杯です。

私の帰任後も復興調査班の仕事が継続されますが皆様方の御健康を祈念いたしますとともに、今回、私が出会った人々との繋がりが人生の大きな財産となったことを申し添えたいと思います。

(和歌山県・藤井 保夫さん)

滋賀県からこちら兵庫県にやって来て6ヵ月目を迎えました。私の赴任期間も終わろうとしています。同じ近畿地方にある県からとはいえ、東の端から西の端へと移る訳です。環境・文化の異なる土地での勤務ということで、来るまでは多少の不安も感じました。ところが、実際の6ヵ月間はわずかなもので、右往左往しながら過ぎていった！というのが実感です。日頃の行いが良かった？のか、担当した調査現場では、遺構・遺物を多数検出し、予想以上の成果を収めることができました。

6ヵ月という短い期間にわずかばかりの現場を担当したことでどれだけ震災の復興に役立ったのかは良く分かりません。しかしながら、私個人としては一言では語り尽くすことのできない、思い出深い経験でした。

(滋賀県・上垣 幸徳さん)

支援職員の異動

(9月30日付 離任)

県 名	氏 名
和歌山県	藤井 保夫
滋賀県	上垣 幸徳

(10月1日付 着任)

県 名	氏 名
和歌山県	永光 寛
滋賀県	木戸 雅寿

復興調査専用

電 話 078-512-2801

FAX 078-512-2804



編集後記

震災以来3年の間に、兵庫県は全国の自治体から協力を得ました。その数は、埋蔵文化財の専門職員に限っても1都2府33県4政令指定都市にのぼり、実に94名の方々にご協力頂きました。人的な支援は復興調査にとって大きな力となっただけではありません。支援職員の方々との交流は、震災復興という厳しい状況のなかで明るい収穫となっています。